



認定特定非営利活動法人

日本がん登録協議会

JACR Japanese Association of Cancer Registries

NEWSLETTER

年2回
発行

JACR ニュースレター

July.2019 No.47

認定NPO法人になりました!

2005年
保健文化賞
受賞

2016年
朝日がん大賞
受賞

日本医師会JACR共催シンポジウム開催報告

猿木 信裕 JACR理事長

群馬県衛生環境研究所



2018年12月8日に日本医師会と日本がん登録協議会(JACR)の共催で「有効ながん検診を正しく実施するために～がん登録への期待～」と題したシンポジウムを開催しました。

がん登録の精度が向上し、全国のがん罹患数が把握されるようになり、地域でがん検診の精度評価に取り組む環境が整ってきました。そこで今回はがん検診をテーマにしました。

シンポジウムでは、はじめに横倉義武日本医師会会長が主催者を代表して、開会の挨拶をされました(今村聡副会長代読)。続いて、厚生労働省医務技監の鈴木康裕先生、日本対がん協会常務理事の山口俊晴先生、国立がん研究センター社会と健康研究センター長の津金昌一郎先生、国立がん研究センター松田智大先生(IACR理事長)からご挨拶をいただきました。

シンポジウム1では、「諸外国でのがん検診とがん対策の位置づけ」として、国際がん研究機構(IARC)のパルサ・バス先生に「五大陸のがん検診」について、ご講演いただきました。質の悪いがん検診は効果がなく、利益よりもむしろ不利益を及ぼすこと、過剰診断の弊害、検診対象者の絞り込みによる不利益の最小化、欧米の組織型検診等についてお話しいたきました。

シンポジウム2「がん検診アセスメント」では、「我が国の対策型検診の歴史と現状」について、斎藤博先生(青森県立中央病院医療顧問)は、わが国の対策型検診で科学的根拠のない検診が実施されている問題、診療と区別したがん検診の原則の理解、医学教育カリキュラムにがん検診を据える重要性についてお話されました。中山富雄先生(国立がん研究センター社会と健康研究センター)は、「有効性の検証とガイドライン作成」について、進行の早いがんは発見されにくいこと、

がん検診においては不利益が利益よりも小さいことが大事であり、ガイドライン作成の要件、各検診の推奨度についてお話しいただきました。お二人とも、がん検診の有効性の指標は死亡率の減少であると強調されました。

シンポジウム3の「がん検診マネジメント」では、雑賀公美子先生(国立がん研究センター)から、「法制下のがん登録のがん検診精度管理への活用」として、がん登録から得られたがん情報は、市町村が管理するものであり、市町村のがん検診データをがん登録室(都道府県)で照合することが現実的であるとのお話しでした。松坂方士先生(弘前大学)は、青森県のがん死亡率が高い原因について検討し、青森県は決して検診受診率が低いわけではなく、早期に発見されるがんが少ないということが課題であり、市町村と協力したがん検診精度向上の取り組みについて報告いただきました。永井尚子先生(和歌山市保健所長)は、厚労省研究班の協力を得て、和歌山県、和歌山市、医師会、県立医大と協力して、がん検診受診者データとがん登録のがん罹患者情報を照合し、要精検以外からのがん発生について報告され、検診事業におけるデータ管理の重要性を指摘されました。

シンポジウム開催にあたり、貴重なご講演をいただきましたシンポジストの皆様、ご協力、ご協賛いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムのスライドは、J-CIP Webに掲載しましたので、ご利用ください。

J-CIP EMPOWER シンポジウム

<http://jacr.info/j-cip/empower/symposium.html>

